

京都大学	博士（文学）	氏名	里内克巳
論文題目	多文化アメリカの萌芽——19～20世紀転換期文学における人種・性・階級		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>旧来のアメリカ文学史において、19世紀末から20世紀初頭にかけての時代は、リアリズムと自然主義という二つの潮流に特徴づけられてきた。しかし、社会が急激な変化を示したこの時期は、アフリカ系、先住民出身の書き手や、東欧やアジアからの移民出身の作家など、かつてないほど多様なバックグラウンドを持った人々が、リアリズムの枠から大きくはみ出すような独自性をもつ作品を世に問うた時代でもあった。書き手の多様性を視野に入れたとき、この時期の文学は、20世紀後半の多文化主義の文学の先駆として位置づけられるのではないか。そうした問題意識から本論考『多文化アメリカの萌芽』の構想は出発している。</p> <p>本論考は12の作品論を積み重ねることを通して、世紀転換期アメリカの多文化的様相を立体的に検討する試みである。周縁的な位置に置かれていたため、論じられる機会が少なかった作家を中心に、世紀転換期という同じ時代に活躍した書き手11人を取り上げ、それぞれの書き手の、時代の状況と深く切り結んだ生や思考が端的に表れていると思われる作品を精選する。そして各テクストを、人種・エスニシティという観点からのみならず、ジェンダーや階級性といった観点とも絡めつつ分析することによって、作品に盛り込まれた複合的メッセージを解読していく。</p> <p>第I部「他者を捉える」では、主流・非主流の書き手による〈他者〉の表象をめぐる問題について、人種・エスニシティと階級・貧困といった側面が交差する地点へと測鉛を下ろす。第1章「写真と言葉で描かれた都市」では、世紀転換期にジャーナリストとして活躍したジェイコブ・リースのフォト・ルポルタージュ『向こう側にいる人々の暮らし』（1890年）を取り上げる。この著作は、ニューヨークのスラムに住む貧民たちを取材し、その生活を文章と写真で紹介した著作であるが、写真が著作の中に有機的に組み込まれていることに着目し、多様な意味を持つテクストとしての写真を本文と併せて解読しようとする点に本章の特色がある。章の前半では、リースの著作における視覚テクスト（写真）と文字テクスト（本文、注釈、キャプション）との関係性や、取材者と取材対象との間の力関係を測定する。それを踏まえて後半では、世紀転換期において階級的・エスニック的な〈他者〉像が言葉や写真によって、いかに構築されていたかという点から、この時代の各エスニック集団（イタリア系、ユダヤ系、中国系、アフリカ系）の捉えられ方を概観し、続く諸章への導入とする。</p> <p>このリース論を糸口にして後続する二つの章では、都市の貧困に取材した作家ステューヴン・クレインと、農村の貧困問題に取り組んだアフリカ系知識人W・E・B・デュボイスを取り上げ、これらの書き手たちが階級的な、あるいは人種的な意味合い</p>			

での〈他者〉を描くことの限界に縛られつつ、いかにそれを乗り越えようとしたかを明らかにしていく。第2章「豊かさの向こう側」では、ニューヨークの下層階級の生活を扱うクレインの小説『街の女マギー』(1893年)を素材とし、浅薄な中産階級的価値観に影響された作中人物たちが、社会的な批判精神を骨抜きにされて特定の空間に封じ込められている有様を、第1章で扱ったジェイコブ・リースの著作を参照しつつ分析する。それによって浮かび上がるのは、下層階級を主な読み手としながらも中産階級的な価値観が紛れ込んでいるダイムノヴェルというジャンルを、クレインが意識的に取り込んだ可能性である。同時に、現実を忠実に再現するという旧来のリアリズム概念よりむしろ、メディアが受け手にとっての仮の〈現実〉を作り上げる、という正反対の方向から『マギー』を捉えなければならないことも見えてくる。貧しい人々を異質な他者として描く同時期の潮流に歩調を合わせながらも、同時にそのような傾向に対する懐疑的な視線を向けもする『マギー』の複合的な側面を明らかにしつつ、この作品の現代性を探る。

第3章「〈車窓の社会学者〉に抗して」では、アフリカ系思想家デュボイスの『黒人のたましい』(1903年)を素材とする。この著作の中盤でデュボイスは、深南部の黒人農夫たちの生活ぶりをルポルタージュ的な筆致で描いているが、貧困にあえぐ農村の黒人たちが描かれる一方で、都市部における移民たちの苦境も多分に意識されている。その点に着目すると、この中盤はデュボイス自身の社会学的著作『フィラデルフィアの黒人』(1899年)や、ニューヨークの貧困に取材したジェイコブ・リースのフォト・ルポルタージュなどの延長線上に位置していることが分かる。だが同時にデュボイスは、それらの先行著作が持っていた〈他者〉を覗き見る姿勢を乗り越えようともしている。そうしたことを論じたうえで、政治へのコミットメントを深めていく途上にあった知識人デュボイスの問題意識を反映するテクストとして『黒人のたましい』を捉えうると結論づける。

第I部と対を成す形で自己と他者の問題を取り上げる第II部「自己を表す」では、社会の周縁に置かれた書き手による自伝テクストの様相に焦点を当てる。まず第4章「死の影の谷を抜けて」では、第I部の最後で論じたデュボイスの著作を再び俎上に載せる。『黒人のたましい』の最後の数章は、評論、自伝、伝記、短編小説と、章ごとにジャンルが移り変わり、難解で知られるこの著作の中でも最も見通しのきかない部分となっている。この章では、互いに異質と見える章と章との間の繋がりを、使われている語彙やレトリック——とりわけ「死の影の谷」という聖書に由来する表現——に焦点を当てることで見出そうとする。その作業を通して、アフリカ系の人々にとっての救世主が到来することへの期待や、その困難さに由来する苦渋を伝えようとする書き手の意図を明らかにする。同時に、大学人という枠を脱して黒人指導者としての一步を踏み出そうとする書き手デュボイスの自伝としての側面も見出し、〈公〉と〈私〉が交錯するこの著作のダイナミズムを探る。

第5章「赤い鳥のビーズ細工」では、先住民系女性作家ジトカラ＝シャの作品集『アメリカ・インディアンの物語』（1921年）を取り上げ、再評価を試みる。自伝、短編小説、政治的マニフェストとジャンルが移ろい、一読すると散漫な印象を与えるこの作品集であるが、章と章を繋ぐ要素に注目することで、全体としての統一性が見えてくる。書き手自身の幼年期から生徒、教師、活動家に至る軌跡を不連続ではあっても語るという側面と、北米先住民の歴史を過去から現代までやはり不連続に辿るという側面が、この作品集には共存している。様々な種類のテキストを並べ、〈公〉と〈私〉という二つのレベルの歴史を大胆に結合させる点で、この作品集はデュボイスの『黒人のたましい』とも響き合う部分を持つと指摘し、併せて、従来は単独で扱われがちであったアフリカ系アメリカ文学と先住民系文学との交差の様相を更に探っていくことを提案する。

引き続いて第6章「奇跡の人の文学」では、上述したエスニック系の作家の自伝的テキストと連結させる形でヘレン・ケラーの自伝を分析する。ケラーの『私の人生の物語』（1903年）は、出版から百年以上が経った今も広く読まれている自伝だが、文学批評の対象にほとんどされてこなかった。本章ではこの〈沈黙する名作〉を取り上げ、その意義を考察する。19世紀にアメリカで隆盛を極めた奴隷物語というジャンルと境を接する作品であることを指摘し、大学の保守的な在りようや対外的な戦争に着手した自国アメリカに向ける、ケラーの批判的眼差しを検討する。文学作品によって自己形成を果たし、大学や社会や国家といった自分を取り巻く外の世界に目を開き耳を澄ませる、批判精神と巧みな表現力を備えた作家としてのケラー像を浮かび上がらせ、この自伝を文学史のなかに正当に位置づけることを目指す。

第III部「物語る」以降の本論後半部は、小説ジャンルに重点を置き、物語という器に書き手の社会的メッセージがどのように盛り込まれているかを作品に即して分析する。ここでは、先住民系、ユダヤ系、中国系の書き手三人の作品を取り上げる。まず第7章「歴史のトラウマを書く」では、『ワイネマ、森の子供』（1891年）を取り上げる。この作品は、アメリカ先住民の血をひく女性作家アリス・キャラハンが書いた小説だが、物語展開に難があり先住民の立場に立って書かれていない、という批判がなされている。この章では、19世紀アメリカの異人種間ロマンスの定式を視野に入れ、同化主義的なイデオロギーから外れる先進的な視点が作品にあることを指摘する。また、〈剰余〉であると否定的に見られがちな物語の結末部にも本章は目を向ける。この結末部では、アメリカ合衆国と先住民との抗争に終止符を打った1890年の「ウンデッド・ニーの悲劇」が物語化されているが、この出来事こそ、作者を作品創作に駆り立てた主因であって、先住民の側に読者の共感を奪回しつつ、合衆国の行ないを告発しようとする作者の巧みな工夫が小説全体に読み取れる、という主張を行なう。

第8章「融けきれない移民たち」は、ユダヤ系アメリカ文学の父祖エイブラハム・カーハンの第1長編『イェクル』（1896年）に盛られたメッセージを、性とエスニシティ

という複合的な観点から解読する試みである。ロシアからの移民である主人公ジェイクは、男性性を過度に誇示し、訛りだらけの英語をまくしたてることで〈アメリカ人〉になろうと奮闘するが、こうした同化の試みは、旧世界の旧弊な価値観を逆に強化することになり失敗に終わる。他方でこの小説は、イディッシュ語しか話さず、ロシアとアメリカが共通して持っているジェンダー規範に背を向けるユダヤ人労働者バーンシュタインが、ジェイクの妻ギトルの新たなパートナーになるという展開も組み込んでいる。二重のプロットの分析を通して、ユダヤ移民の男女が自らを見失うことなくアメリカ人になるための条件をめぐる作者の考えを明らかにする。

第9章「トランスパシフィックの物語学」では、アジア系アメリカ文学の源流に位置する女性作家スイシンファー（本名イーディス・イトン）の代表的な短編小説三篇を解読する。世紀転換期に人気を博したジャポニズム文学は、アジア人女性とアメリカ人（白人）男性との恋愛を描いても、アメリカ人女性とアジア人男性との恋愛は回避する傾向があった。英国人の父と中国人の母との間に生まれたユーラシアン（欧亜混血）であるスイシンファーは、そのような非対称性を持ったロマンスの定式に異を唱えるような小説を書くことで、人種・民族や性や階級をめぐる主流のアメリカ人読者が抱いている偏見を是正しようと試みた。第III部で取り上げたキャラハン、カーハン、そしてスイシンファーは、それぞれ民族的背景こそ異なるものの、男女の関係を軸にしたロマンスという物語展開を通して社会的なメッセージを発信しようとした点に共通性が見られる。

第IV部「過去を振り返る」では、第III部に引き続いて小説作品の政治ロマンス的な側面に光を当てるが、この最終部では特に、黒人奴隷制の負の遺産という問題に書き手がどのような眼差しを向けているかを検討する。アフリカ系アメリカ人たちの多くは、南北戦争の終結と共に奴隷の身分から解放されたが、その後の政治的混乱の結果、解放とは名ばかりの低い社会的地位に甘んじざるを得なかった。第IV部ではまず、このような同時代の状況に対して、アフリカ系作家たちがどのような形で反応し批判を行なったのかを、フランシス・E・W・ハーパーとチャールズ・W・チェスナットの作品を素材にして検討していく。

第10章「〈人種〉のメロドラマ」では、アフリカ系女性作家ハーパーの唯一の長編小説『アイオラ・リロイ』（1892年）を取り上げ、人種と性という二つの観点からの政治的主張が、どのような形で作品に盛り込まれているかを検討する。この小説は、恋愛ロマンスのプロットを前面に押し出し、ヒロインがどのような男性を拒絶しまた選び取るのか、という興味で読み手を牽引する。それは同時に、作者自身の政治的見解を読者に共有させるための仕掛けでもある。作品内で使われている〈影〉や〈病〉をめぐるレトリックにも関心を払いつつ、本論では、南北戦争という過去を物語の背景としながらも、小説執筆時点におけるアフリカ系アメリカ人の社会的向上の必要性や、その際に女性が果たすべき役割といった問題について、作者ハーパーが伝えよう

とした見解を、小説作品の分析を通して明らかにする。

第11章「〈人種〉から〈人類〉へ」では、アフリカ系作家チャールズ・チェスナットの『杉に隠れた家』(1900年)を取り上げる。この小説は二部構成になっており、混血のヒロインが白人として幸福を掴もうとして失敗する前半と、彼女が黒人として生きようとして挫折し、死に至る後半に分かれている。その中間に置かれた第18章は一種の幕間としての役割を果たしており、作品批評での盲点となってきた。等閑視されてきたこの章を、本論では小説の脇役たちに光を当てる人物スケッチ集成と捉え、そこから作品全体における作者の狙いをあらためて再考する。その作業から、世紀転換期のアメリカでは禁忌となっていた白人女性と下層階級の黒人男性との恋愛を、人種偏見に染まった当時の読者に受容させるための巧みな工夫を明らかにし、人種という区分を超えて人類が共存するための寛容を訴える、作者の隠れたメッセージを解説する。

最後の第12章「アメリカの始まりに目を凝らして」は、第I部で扱った社会の主流派による〈他者〉の表象という問題に再び立ち返る。この章では、国民作家マーク・トウェインの短編「インディアンタウン」(1899年)とそれを基にして書かれた長編小説『それはどっちだったか』(1899-1906年)を取り上げる。失敗作という評価を受け、これまで本格的な分析の対象とされてこなかったこの長短二編の未発表作を重ね合わせて分析することで、奴隷制と人種問題をプロットに組み込んだこの物語の重要性を明らかにする。南部の田舎町インディアンタウンを舞台にするこの二作は、いわゆる〈ミシシッピもの〉に代表されるトウェインの南部探求の試みの終着点かつ総決算として位置づけられる。更に、殺人を犯しながらもそれを隠して嘘をつき墮落していく主人公の姿は、作者トウェインの誇張された自画像であると同時に、黒人(アフリカ系)のみならず先住民を含めた〈他者〉を抑圧してきた歴史を持つアメリカ合衆国の肖像でもあることを論じる。章の結語では、この主流作家の作品を、これまで論じてきたマイノリティ作家らのそれと突き合わせることで本論考を総括し、アメリカ世紀転換期の文学の現代性と更なる見直しを展望して全体のまとめとする。

(論文審査の結果の要旨)

アメリカ文学研究では、1970年代のフェミニズム批評の台頭や、アフリカ系（黒人）女性作家の活躍、そして80年代以降における多文化主義の登場やエスニック系作家の台頭をきっかけにして、従来の白人男性中心主義的なアメリカ文学史の見直しが進められ、その結果として、人種やエスニシティという点でも多様な、過去の書き手の再発見が行われてきた。里内克巳氏の本論文は、こうしたアメリカ文学研究における近年の動向を踏まえつつ、アメリカ社会がさまざまな矛盾や軋轢を抱え込むことになった、19世紀から20世紀にかけての世紀転換期における文学に焦点を当て、人種・性・階級など多様な立脚点に立つ作家11名の、再評価が始まったばかりの比較的知られていない作品群を中心に論じながら、そうした個別の文学間の関係性を探り、緩やかなネットワークとして有機的に総合していくことで、この時代のアメリカ文学の総体を浮かび上がらせようとした、きわめてスケールの大きな力作である。

第Ⅰ部「他者を捉える」では、世紀転換期のニューヨークのスラム地区において貧しさに苦しみながら暮らす移民を異質な他者として描いた、ジェイコブ・A・リースのフォト・ルポルタージュ『向こう側にいる人の暮らし』と、スティーヴン・クレインの最初の長篇小説『街の女マギー』がまず論じられる。アメリカ自然主義の嚆矢として名高いクレインのこの小説が、リースのフォト・ルポルタージュとの照応で読まれるとき、そこには異種ジャンル間の相互浸透性とともな、見る人と見られる人の間に成立するメロドラマ的演劇空間という、興味深いテーマも抽出されている。

アフリカ系思想家のW・E・B・デュボイスの『黒人のたましい』が、第Ⅰ部と第Ⅱ部「自己を表す」の二つにまたがって、異なる視点から論じられているところも本論文の統合的な特徴をよく表している。この第Ⅱ部では、自伝的要素を多く含んだ作品を取り上げることで、「他者」から「自己」の表出へと議論の焦点が切り替わる。

第Ⅲ部「物語る」では、論じる作品の対象が自伝から小説へと移り、先住民系女性作家アリス・キャラハンの『ワイネマ―森の子供』、リトアニアからの移民であるユダヤ系作家エイブラハム・カーハンの『イエクル』、英国人の父親と中国人の母親の間に生まれた女性作家スイシンファアの『スプリング・フラグランス夫人』といったエスニック・ロマンスが取り上げられる。里内氏は、こうした作品群が大衆的な恋愛ロマンスの枠組みを借りながらも、そこにアメリカの社会や歴史に対する先鋭な問題意識を反映させていると論じる。とりわけ、主人公がアメリカ人に変身しようと試みることによって、逆にユダヤ性を露わにしてしまうという逆説を孕んだ、カーハンの『イエクル』を論じる第8章は、世紀転換期アメリカの同化主義がもたらしたものを丹念なテキストの読みによって説得力豊かに描きだしており、本論文の白眉であると言える。

第Ⅳ部「過去を振り返る」では、世紀転換期の小説における人種の問題に焦点が当

てられ、里内氏の主な研究対象であるマーク・トウェインの未発表に終わった晩年の作品『それはどっちだったか』に関する論考が第12章として最後に置かれる。ここで里内氏は、この小説の結末近くで前面に現れる奴隷制の問題を取り上げ、黒人と白人の混血である登場人物のジャスパーが、『ハックルベリー・フィンの冒険』の逃亡奴隷ジムの造形をより進化させたものだと捉え、従来はほとんど等閑視されてきたこの作品をトウェインの到達点だとして大きく評価する。これまでのトウェイン批評に転換を促す刺激的な論考である。

本論文は、里内氏が2001年から、日本英文学会が発行する『英文学研究』をはじめとして、さまざまな媒体で発表してきた単独の論文13篇をもとにして再構成し、一冊の本にまとめあげたものだが、その加筆修正・改訂は大幅で、なかには分量が倍以上になったものもある。そうした事実は、里内氏が本書を有機的に構成するためにどれほどの努力を注いだかを証明している。また、小説作品のみならず、ルポルタージュや自伝といったジャンルに属するものも文学作品と同等に扱い、テキストの精緻な読みによって新しい解釈を提示しようとする真摯な姿勢も本書の大きな特徴で、里内氏が本研究科の大学院に在学していたときに身につけた文学研究方法が実を結んでいる。ただ、つねに大きな図柄を視野に入れるあまり、ときには細部の読み方に強引なところが散見される点、そして細部の解釈において単純な誤りがなくはない点が惜しまれるが、これらは全体としての本書の達成から見れば些細な欠点であり、その価値を大きく損なうものではない。いずれにせよ、本書は里内氏が意図したとおり、世紀転換期アメリカ文学の研究者にとって必ず参照すべき書物として十分な資格を備えた道標的著作に仕上がっており、その労を多としたい。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。平成二十九年十二月二十二日、調査委員三名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。